

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.24
Oct. 2022

編集後記

ちょっとオタクな話をしましょう。宮崎駿のマンガ、「風の谷のナウシカ」をご存知でしょうか。この中に、人工で作られた巨大な粘菌が災厄となって人々を追い詰めるというエピソードが出てきます。人間にとってはとても厄介な化け物で、一生懸命排除しようとしても失敗します。ですが、「森（このマンガでいうところの腐海）」はこの粘菌を懐に抱き、森自体の複雑な生態系の一部として受け入れてしまうのです。

このエピソードは、実は生態系の振る舞いの本質に鋭く迫るものなのですが、同時に「森」を多様性の象徴として描いていて、そこには排除すべき生き物などいないのだというメッセージを読者に伝えているようにも思えるのです。

さて、私たちが見てきた森づくりも実は同じで、森づくりにはたくさんの「やること」があります。だから幼児でも障がい者でもそれなりの仕事があって、居場所がある。それは誰でも必要とされているということ。誰も排除されないということ。森という多様性を持つ包容力。それは、今の社会が失いつつある、森づくりの一つの大切な側面なのかもしれません。ということで「風の谷のナウシカ」、他にも色々示唆に富むマンガです。未読の方は秋の夜長にぜひ。

モリイク vol.24 2022年10月発行

発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証材およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。

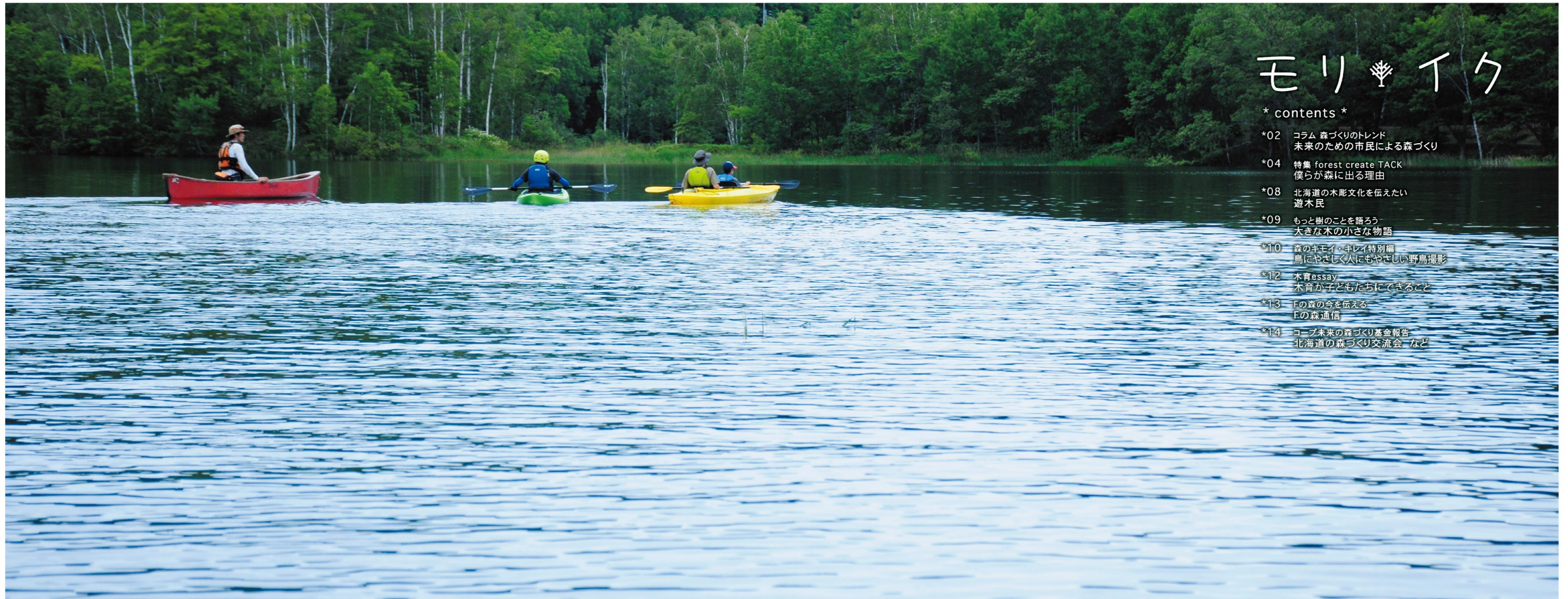


居場所としての 包容力

誰だって森に行ける。
誰もが森に包まれる。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。



モリイイク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 forest create TACK
僕らが森に出る理由
- *08 北海道の木彫文化を伝えたい
遊木民
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 森のキモイ・キレイ特別編
鳥にやさしく人にもやさしい野鳥撮影
- *12 木育essay
木育が子どもたちにできること
- *13 Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *14 コープ未来の森づくり基金報告
北海道の森づくり交流会 など

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

この冊子の読者の方は、日々の生活に疲れたら森林や自然の中でリフレッシュ、という方が多いと思いますが、近年障がい者の森林体験の重要さも指摘されるようになってきました。精神障がい発達等について症状の軽減に役立ったり、リハビリテーションを兼ねた作業療法となるなど様々な効果があるとされています(東京農業大学の上原先生の知見です)。障がい者の方にとっても森林の持つ癒しの機能は変わりません。

森林体験だけではなく、森林や木の利用に関わって障がい者の就労の場づくりも進んできており、林業と福祉の連携「林福連携」と称されています一も進んでいます。ただ、危険を伴う森林づくりの作業は安全面にも十分配慮する必要があります。以前は、森林の外で薪づくりを行うなど安全管理がしやすい仕事が多かったのですが、例えば八女市の社会福祉法人では燃料としての林地残材の収集を、「見つける」「拾う」「運ぶ」「切る」等の作業に分

割し、利用者が得意な分野で森林の作業に取り組めるようにしています(全国レクリエーション協会報告書による)。障がい者が森に入ると体験活動や作業をすることにはハードルがあります。そこでは障がい者を支援する人と、森に関する専門家などの連携が必要とされています。

本特集でとりあげた「Forest Create TACK」は、障がい者の自然体験を先駆的に進めている団体ですが、この団体のある当麻町はユニークなま

ちづくりを進めており、そこに林福連携も位置付けられています。

当麻町は「食育、木育、花育」を三育としてまちづくりの基本とし、また三育を地域の産業の育成に結びつけています。木育では子どもたちへの森林教育や中学校の学習機の天板を自分たちで作成することから取り組みをはじめ、その後木育の拠点フィールドとなる「くるみなの森」と拠点施設の「くるみなの木遊館」を整備しました。木遊館は町産材100%で

建てられ、また立ち上げから2021年3月まで、指定管理を知的障がい者に関わる社会福祉法人「当麻かたるべの森」にお願いしていました。木遊館に備え付けられている家具や玩具は「当麻かたるべの森」を含む福祉事業所の製品を用い、また木遊館を障がい者の就業の場とするなど、建設から運営まで「林福連携」が進められたほか、障がい者による森づくりにも取り組んでいます。当麻町では地元の森林組合と協同で、森林整備や木材活用にも積

極的に取り組んでおり、木育と林業が連携し、林業の取り組みが木遊館の建設や運営を支えているともいえます。

障がい者が森づくりに関わるためには多様な人々の連携を必要とし、そこで障がい者の世界が広がり、また森づくりの新しい連携が生まれています。当麻町の取り組みは教育・福祉・産業をつないだ新しい森づくり・まちづくりといえると思います。▲



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長
1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

僕らが森に出る理由

Warum gehst du in den Wald?



森で遊ぶことの 意味ってなんだ?

「え？ 障がい者の人たちが自然の中で遊ぶの？ 遊んでいいの？」というイメージを持つ人もいるかもしれません。それは、私たちは、「障がい者は外に出してはいけない人たち」という印象を、なぜか持ってしまうからなのかもしれません。しかし実際には障がいを持った方が自然を楽しむ、というシーンは少しずつ多くなっているように思います。それは、彼らを取り巻く社会とその視線がずいぶん変わってきた、ということも関係しているかもしれません。

障がいを持った方々は長らく、いわゆる健常者がつくった社会構造と相入れないために、いわば見えないところに押し込まれるような扱いを受けてきました。しかし社会に多様性が求められてきたことや、精神医学が進んで彼らのさまざまな側面が見出され始めたことなどから、社会の一員として支え合いながら共に生きていく在り方へと変化しつつあります。ただし、今でもその隔たりは大きく、健常者との日常の接点はほとんど皆無とっていいかもしれません。

そんな中で、障がいを持った方と森づくりをしてみよう、森に連れ出しているんな遊びをしてみよう。そんな活動にどんな狙いや意味があるのか、横井さんに聞いてみました。

り、真面目そうでもある表情が印象的。

吉田さんは木の皮剥きが得意です。黙々と作業を続けていて、地味な作業だけど楽しいのだそう。「TACK」でいるんなアウトドアの遊びを体験して、今や自分のカヤックを持っていたりトレイルランニングの大会に出場したりするなどのアスリートぶりを発揮しています。

少し歳の若い金田さんも森での遊びが大好き。ツリークライミングは揺れるからちょっと怖いけど、高いところに登るのは楽しい。吉田さんに影響を受けてトレイルランニングもはじめてみた。森での仕事は薪を集めたり、積み上げること。割った薪が積み上がっていくところや、全部積み上がったときには達成感があって楽しいのだそう。

そんな二人にとって森や湖は楽しい場所、癒やしの場所です。地球温暖化とか難しいことはよくわからないけど、森も湖もなくなるとは困る大切な場所だと話してくれました。

みんなを連れて 森に行こう

旭川の隣町、当麻町で障がいを持った人たちと一緒に森づくりやアウトドアを楽しむ自然ガイドがいます。それが、横井真順さんとパートナーの智代里さんが、2003年から始めた「Forest Create TACK」。障がいを持った方を中心に、キャンプ、カヌー、サイクリング、ノルディックウォーキング、ツリークライミング（クライミングギアを使った木登り）、トレイルランニング、遠方へのドライブなどのほか、冬には歩くスキーやスノーシューを使った森歩きも楽しんでいます。つまり、できそうな遊びは全部やってみようというのでしょうか。森づくりでは、町内の障がい者施設「当麻かたるべの森」が管理する森の間伐材を使った薪割りと整理や、森の立て札を作ったり外来種の除去をして生態系を保全するなどの作業をしています。

この日の森づくりのメニューは薪割りと割った薪の整理と、丸太の皮むき。参加したのは吉田さんと金田さん。二人は森づくりの常連メンバーで、森で過ごすのが大好き。それぞれの役割をテキパキとこなします。炎天下で体調に気をつけながらだけど、作業中はずっと集中しているようで、楽しそうでもあ

話してくれた人

金田 宏弥さん
薪割りの手伝いや薪積み
が得意。カヌーが好き。

吉田 幸敏さん
木の皮剥き、枝払いなど、
マイカヤックを所有。





僕らが
森に
出る理由
Warum gehst
du in den Wald?



もっと森の中へ 連れて行きたい

真順さんはお父さんが障がい者施設を運営していたこともあり、小さい頃から周囲に知的障がいを持った方もいたので、もともと馴染みがあったのだそう。最初は当麻町の障がい者施設、「かたるべの森」の職員として働き始めますが、そのときは作業所での木作業の提供をするのが役割でした。仕事のモットーは楽しくやること。子どもの頃の記憶も手伝って、みんな一緒に家族のような作業所の雰囲気を目指していたそうです。

「かたるべの森」は22ヘクタールの広大な敷地を持っており、その森には、コンサートホールをつくるなどの構想はあったものの、森づくりについては、イメージされていなかったといいます。ところがある時、みんなで森を

歩いていて、「ササなら切れるよね」という話になり、ハサミを手にササ刈りをしたら道が作れることがわかりました。これは作業になるぞ、ということで森の整備をする作業チームを立ち上げたことから森づくりは始まりました。「チェーンソーや重機を使うことだけじゃない、ササがあるから、じゃあ切ろうか。というだけでも森づくりになる」という気づきがあったのだと真順さんは話してくれました。

しかし、施設職員として働く以上、さまざまな業務に携わらなければならず、自分が得意なことでもうまく連携できればその方がいいだろうと考え、独立した立場をとることにしました。そうして立ち上げたのが「Forest Create TACK」なのです。

ですから、範囲としては「かたるべの森」の活動を大きく含みますが、週末などには独自にかヌーやサイクリングなどのアウトドア遊び

に連れ出す、というスタイルで活動しているのだそう。横井さんお二人の活動で、「かたるべの森」に通う利用者の皆さんは、さまざまな森の遊びにアクセスできるようになりました。智代里さんも「違う世界を知ること大切にしてほしい」といいます。ご自身は「かたるべの森」に勤務していて、「TACK」と二足のわらじで活躍していますが、「木工や織物、野菜づくりなどをするけど、それだけでなく自然の中で遊んだり、仕事をすることは世界を広げることで、そうしてみんなの心を育てたらいいと思う」と話してくれました。

みんな楽しい 森の仕事

では、障がいを持った方にとって森での活動ってどんな影響があるのでしょうか。「自然の中で過ごす」と落ちてく、「状態がよくなる」とい

ようなことをよく聞きますが、横井さんたち自身はそうした顕著な変化を感じることはないとのこと。それでも、「絵を描くときは、森に行った後は感じが変わるって、絵画指導のスタッフがいましたね」と智代里さん。森にいる時の様子について、真順さんは「楽しい?って聞くと、楽しいってオウム返りする部分もあるんだけど、楽しんでいると感じますよ。僕らの気持ちとみんなの気持ちは一緒なんじゃないかと思います」。また、智代里さんも「彼らは自分でしんどい、とか、いやだ、と思ったら来ないんです。いやなことはやらない。はっきりしている。だから森に来るということは楽しいんだと思いますよ」と、実感として楽しんでいるということを感じているといいます。

森づくりを通じて 気づいたこと

森づくりの作業に関してはどうでしょうか。真順さんは続けます。「森づくりの作業ってはっきりしているんですよ。薪をこれだけやったら終わりとか、積み上げたら終わり。木工のサンドペーパーがけとかって、どこで終わったらいいのかわからない部分もあってずっとやったりしますから。あと、僕らはチェーンソーじゃないと切れないような丸太も手ノコ一本でずーっと切ったりする。切れたら、おー！切れたーってみんなで盛り上がりたり、やる方は楽しいんだと思います。それと、やれることはなんでもあると思っていて、薪割りでも不器用で斧を持ってない人は運ぶ役割をしたり、周りで応援する役がいたり、一輪車をやらせてみても、運ぶなくてもいいんです。みんなやってる感があって、どんなことでも仕事になる。それが森づくりの現場なんです。

改めて、障がいを持つ方が森で遊んだり、

森づくりをすることの意味について考えてみましょう。

生産性と成長ばかりを求められる日本社会において、障がいを持った方々は長い間お荷物扱いされてきました。社会の中には彼らの居場所がなかったのです。ところが森には仕事があります。健常者は健常者なりの、障がい者は障がい者に応じた、それなりのやることが、森づくりの現場にはあるのです。仕事がある、ということは必要とされているということ。社会で必要とされる場所、それが居場所だとすれば、「それが欠かせないんだと思います。どんな形でもいい、誰がいてもいい、という場所なんです。障がいを持った人って一般的な社会の枠組みから漏れてしまう。僕らはその受け皿をもっと広くしていきたいんです」と真順さんが話すように、つまり、森と森づくりは誰でもが得られる大切な居場所なのです。

居場所を生み出す 森づくり

横井さんは2020年の春、「support & cafe PINE CONE」というカフェを開きました。それは、森だけでなく、障がいを持った人たちがいつでも訪れ、集まれる居場所を広げられたからだといいます。「例えば障がいを持っている人のケアを家でできない、というときに使ってもらったり、今は全然知らない人と障がいのある人の接点になっていたりと、この場所からつながりが広がっているんです。福祉の関係の外につながりを広げる場所は必要だと思っています」と智代里さん。こうした物理的な居場所づくりも自分たちが目指す活動のひとつなのだそう。

「障がいをもった人が住みやすい町だったり、行きやすい森だったり、集まりやすい場所



だったり、そういうことの繋ぎ役とかにうまく役割を持ってほしいな」と、真順さんもこの先のことについて語ってくれました。

森づくり作業の次の日は森の中の小さな湖。横井さんたちの案内でカヌーを楽しむのはいつものメンバーと健常者の混じった参加者たち。

自然や森は誰もが楽しみ、役割と居場所を持てる空間です。森づくりはそんな、誰もが必要としている居場所をつくる活動なのかもしれません。横井さんお二人の活動は、人として不可欠な「居場所」をつくり、育てることで、それは、実は障がい者・健常者問わずみんなが必要としているものなのです。

静かな湖面に弾けるみんなの楽しそうな笑顔に、森づくりの意味が、また一つわかったように思いました。▲

社会福祉法人 当麻かたるべの森 について

当麻町にある「かたるべの森」は、障がい者の自立した生活を支えることを目標に、平成8年に設立された社会福祉法人です。22ヘクタールに及ぶ広大な敷地を有し、創作的活動を軸に絵画やさをり織、陶芸や森林整備、アウトドアなどの活動を展開しています。ほかにも美術館、ペーカリーなどを運営するなど、道内でも先進的なスタンスでの障がい者支援を行っています。

かたるべの森ウェブサイト <https://katarube.jp/>



話して
くれた人

Forest Create TACK

https://blog.canpan.info/tack_blog/

みんな(障がい者)にいるんな経験してもらいたい。長くこういう場を継続できたらいいな。

横井 真順さん

森に癒されます。森での活動でいろんな経験を落として行けたらいいと思います。

横井 智代里さん



Support & Cafe PINE CONE

大きな木の 小さな物語

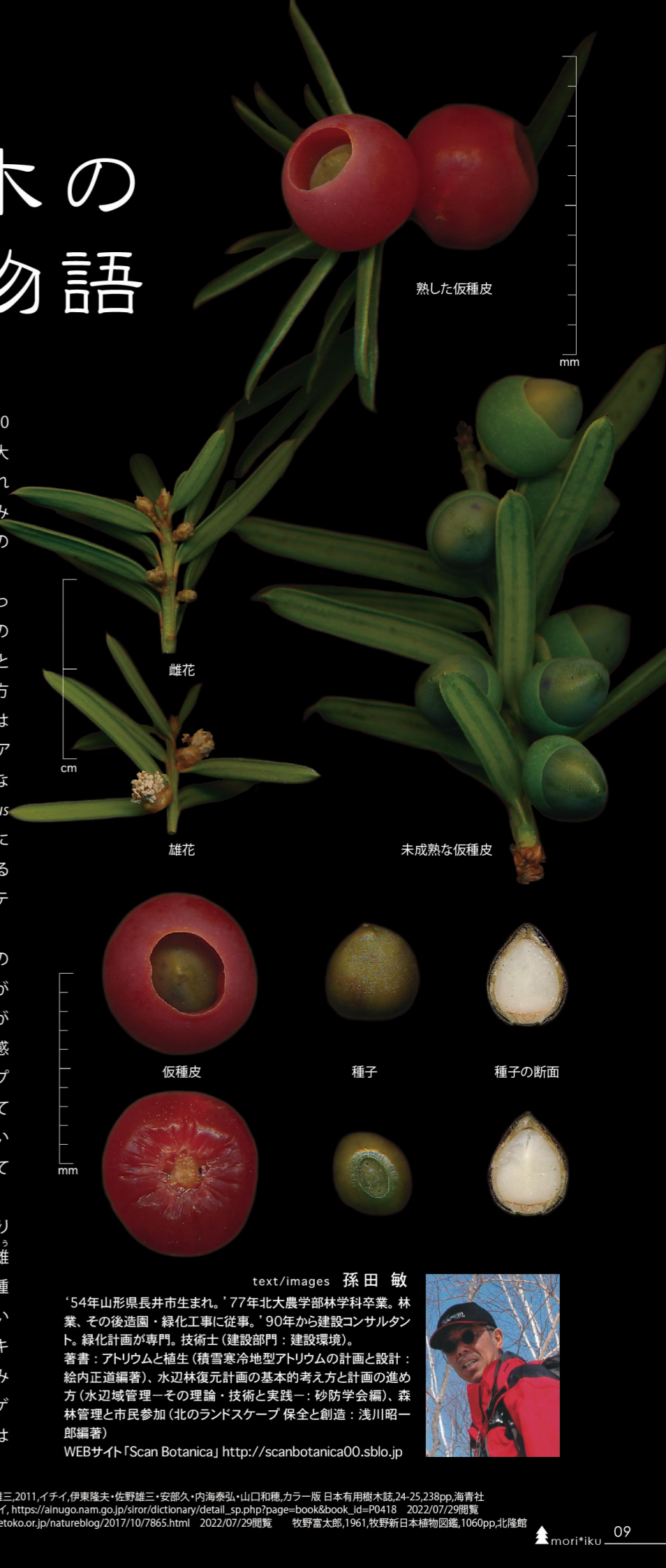
⑩ イチイ

イチイは、大きなものでは高さ10~15m、太さ50~100cmほどにもなる常緑針葉樹です。こんなに大きなものはまれですが、庭木や垣根として利用されています。イチイというよりもオンコの方がなじみ深いでしょうか。そう、秋に赤い甘い実がなる「あの木」です。

イチイの名の由来は、仁徳天皇がこの材でつくった笏しやく（昔の文官が身につけた木札）を宮廷の臣の中で最も位が高い「正一位」の者に授けたからだとされています。オンコは東北・北海道地方の方言のようです。名の由来は不明です。牧野富太郎はアイヌ語由来と書いていますが、間違っています。アイヌ語ではラルマニまたはクネニ（ku(弓)ne(になる)ni(木)）。学名は*Taxus cuspidate*で、属名の*Taxus*は「弓」という意味もあります。これを知ったときには、表現する言語こそ違ってももの同じ使い方をする場合には同じ意味に名付けるのだから、と遠くラテン語圏の人たちがずいぶんと身近に感じました。

イチイは全国に分布し、古くから木彫や細工物の材料として重用されてきました。白い辺材と赤みがかかった心材の色味、そして成長が遅いので年輪が詰まっているけれど刃をあてたときのほどよい感触。これらの性質によるものなのでしょう。キャンプの時にイチイの端材を持ってきた仲間がいて、とてもまろやかな温かみのあるたき火をしたことを思い出しました。贅沢なたき火だったのだから、改めて思います。

秋にみえる赤い実。果実とは呼ばず、タネの周りの水っぽい部分は仮種皮かしゅひといます。イチイは雌雄異株しゆうといって雌と雄が別々の木です。すべてが仮種皮をつけるわけではありません。それとひとつだけのこと。仮種皮は甘いのですが、中のタネはタキシンという毒が含まれているので絶対噛んだり飲み込んだりしてはいけません。「きれいなバラにはトゲがある」ではありませんが、「自然界の甘いものには気をつけよ」ですね。



熟した仮種皮

mm

雌花

cm

雄花

未成熟な仮種皮

仮種皮

mm

種子

種子の断面

text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門・建設環境）。著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理—その理論・技術と実践—：砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造：浅川昭一郎編著）WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



参考文献 佐藤孝夫, 2011, 増補新版 北海道 樹木図鑑, 345pp, 亜細亜社 佐野雄三, 2011, イチイ, 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂, カラー版 日本有用樹木誌, 24-25, 238pp, 海青社 国立アイヌ民族博物館, 国立アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ, イチイ, https://ainugo.nam.go.jp/sir/dictionary/detail_sp.php?page=book&book_id=P0418 2022/07/29閲覧 知床自然センター, STAFF BLOG, 噛んではいけない, <https://center.shiretoko.or.jp/natureblog/2017/10/7865.html> 2022/07/29閲覧 牧野富太郎, 1961, 牧野新日本植物図鑑, 1060pp, 北隆館

北海道の
木彫文化を
伝えたい。

遊木民

<https://yuubokumin.net/>

「熊の木彫」といえば、北海道を代表する昭和のお土産。全国のお土産のテレビの上が定位置でしたが、今やもたて嬉しくないお土産と揶揄されることも。でもよく見てください。木彫の熊にはいろんな彫り方、いろんな形や表情が。職人やその系譜によって実に多彩な熊たちがいるのです。そんな理由もあってか、近年熊の木彫が再注目されているのをご存知ですか？札幌にある「遊木民」は、そんな熊の木彫を中心に、北海道の民芸品を集めたお店です。

店主の川口 拓二さんは、長い間北海道の土産物の卸をしていました。ですから熊の木彫については最盛期に大量生産で質のよくないものが大量に出回ったのを見ていたし、また、近年はインバウンドの観光客の増加の影響もあって、食品などの製品が北海道土産の主流になり、木彫などはあまり売れなくなっていることも心配しています。木彫の熊は職人一人一人が違う感性で彫る。だから

表情豊かであるんな熊が生まれる。それが一番の魅力。でも、こんな良いものがあるのに知られていない。知られない・売れないから木彫職人も減る一方。

「お客さんと直に話したい、伝えたい、木彫の良さを紹介したいんです。卸では直接会えないでしょう？」そんな思いから、2015年に小売店である「遊木民」を開きました。「こういう店がちゃんとした木彫を売って、職人の地位を向上させたい」と、お店の意義について話します。「今、付き合いのある職人は若くて70代ですよ。この先なくなってしまうかもしれない。この店で熊の木彫に興味を持ってやってみよう、と思ってくれる人もいるかもしれないから」と、木彫の文化が未来にもつながっていくことを大事にしたいのだそう。そうしたこともあって、店の奥の工房では道内各地の職人から技を学んだ川口さんの息子さんが木彫の製品を制作しています。「木彫の文化をつなげていくためにも、この店のよう

に売り先があることも大事なんです」。

ところで、近年の熊の木彫の人気の秘訣はSNSにもあるのだそう。「インスタグラムをやっていると全国の人が見てくれて、情報交換ができます。そういう交流がとても楽しいですね。中には自分でも熊を彫るようになって、私の気に入った物はこの店にも出しています」と、全国からも注目されているとのこと。近年、熊の木彫が再評価されていることには、川口さんのこうした情報発信も一役かっているのでしょう。

2年後の2024年は熊の木彫が生まれてから、なんと100周年なのだそう。多くの職人たちが育ててきたさまざまな形、さまざまな技術。無垢の木のぬくもりと時間とともに変化していく表情。いろんな魅力を持った「熊の木彫」は北海道の宝物。もっと多くの人々がその魅力に気づき、そしてこの宝物が未来へと長くつながって、この先100年も北海道の宝物であり続けてほしいものです。



お店の中は熊の木彫をはじめ、カトラリーや民芸品など、たくさんの種類の木製品(左)。製品の一部はお店の奥の工房で作られている(中)。木の温もりや経年変化を楽しんでほしいからと、仕上げを無垢にこだわった川口拓二さん(右)。



特別編
森林のキモイキレ
野生動物との距離を考ふる



写真提供：大橋 弘一

鳥にやさしく 人にもやさしい 野鳥撮影



かわいい姿、かっこいい顔つき、面白い仕草。
野鳥をきれいに撮って、ネットでシェアしてみんなに見せたい!という人も多いでしょう。

最近ではカメラの進歩やSNSの発達で自然に親しむ人が増えたのはうれしいこと。でも「いいね!」が集まる写真を求めるあまり、一部のカメラマンが鳥に近づきすぎるなど、鳥たちに悪い影響があると問題にもなっています。どんなことが良くないのかな? 今回は野鳥撮影のマナーについて考えてみましょう。

どんなときでも
バード・ファースト



まず忘れてはいけないのが**野鳥は人間の所有物ではなく野生の生きもの**ということ。鳥が嫌がることはせず、近づき距離、撮影にかかる時間、撮影時の態度などすべてに気をつけましょう。「そんなの当たり前!」と思うかもしれないけれど、**カメラをのぞいているうちに忘れてしまう人もいます。**つい、鳥に夢中になって、生息地を荒らしたり、まわりの人々の迷惑になっていませんか?



鳥のサイン、見逃さないで

警戒!

体を細くして身構える行動が見られたら、それ以上近づいてはいけないサイン。どんな鳥にも共通する重要なサインです。

自然な
しぐさ



ヒシクイらしい一枚。おどかさなければ、群れで過ごす自然な表情が撮れます。

わかりやすいサインばかりではありません。種や個体によって反応はまちまち。経験豊富な人に同行してもらい、鳥について学びましょう。ノウハウを身につけて、経験を積む努力が必要です。



リラックスしながらも、もう少し近づくと飛びそう。目の光に最低限の警戒心。

ノビタキ



怖がっていない様子が目つきでわかります。

ヤマガラ

ヒシクイ

ガン類の場合は、首を伸ばして頭を左右に振ったら「外敵が近づいて来て危険だから逃げよう」という仲間への合図。そんな仕草が出たら近づき過ぎです。



警戒!

ヒトにもやさしい撮影を

◆撮影地はみんなが利用する場所

「人にも優しく」は必要な心構えです。珍鳥や人気のある鳥が出現したり、営巣・繁殖すると多くの撮影者が押し寄せます。超望遠レンズ付きのカメラや三脚を持つ人が集まると、それだけで**圧迫感**があります。公園など公共の場であれば、**他の利用者の迷惑**にならないよう「人にも優しく」接することが大切です。もちろん、ゴミを捨てたり植物を傷つけたりしないなど、野外活動をする人としてのマナーも守りましょう。

◆十分な知識とやさしい気持ちで行動を

マナー違反者への「声かけ(注意)」がきっかけで撮影者同士のケンカになることも。マナーを守っていない人は自分勝手な気持ちというより、**経験や知識不足、ルールを知らない**場合が多いようです。強い口調や、教えてやっているというように上から目線で注意されると嫌です。相手から怒りや反感を買えば、そもそも、人々が騒いでいると鳥を驚かせてしまいます。**思いやりを持って穏やかに話しかけてあげてください。**



morinoko



新岡薫 / エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかけ。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
<http://etobunsha.com>

お話を聞いた人

大橋 弘一 さん

野鳥写真家

的確な野鳥生態写真をわかりやすい平易な文章と共に紹介する活動を30余年継続中。「庭や街で愛でる野鳥の本」(山と溪谷社)、「野鳥の呼び名事典」(世界文化社)、「日本野鳥歳時記」(ナツメ社)など著書・共著書は20冊余。BIRDER連載「鳥たちの素敵な名前物語」など月刊誌・新聞等の連載多数。NHK「ラジオ深夜便」で月に一度語る「鳥の雑学ノート」も好評。日本鳥学会・日本野鳥の会・日本自然科学写真協会各会員。ウェブサイト <https://ohashi.naturally.jp.com>

宮本尚 / きたネット

森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコ、シンガーソングライター、宮本尚Song-Gardenというバンドでライブハウスなどで演奏しています。
<http://kitanet.org>

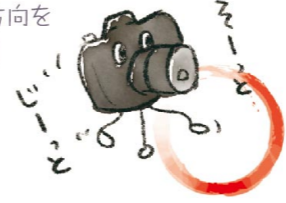
子育ての
ジャマをしないで

繁殖時の撮影には一層注意が必要です。子育てを邪魔する行為は絶対にやってはいけません。普通、人が近づきすぎると鳥は飛んで逃げますが、巣を作り、卵を産み、ヒナを育てる親鳥は逃げられません。それを理解せずに近づくと、親鳥は巣や卵、ヒナをあきらめて捨てる場合があります。

『日本野鳥の会』では、繁殖時に巣や卵、ヒナを見つけた場合、どんな鳥であっても速やかにその場から離れることをすすめています。このような考え方もあることを理解し、肝に命じましょう。撮影しない、撮影を中止する勇気を持ってください。

野鳥撮影の技を 学んでから!

鳥が嫌がらないように近づくためには「**急な動きをしない**」「**物音を立てない**」ことが大原則。経験を積んで十分に慣れてきたら「鳥の動きと並行に移動しながら少しずつ近づくとか、「鳥が動いている時はその方向を見定めて先回りして待つ」といった上級テクニックを使うことも可能になります。



水場など、同じ場所で時間をかけて待ちながら撮影する時には、人の姿を隠す**ブラインド(目隠し)**や車の中から撮影する方法がおすすめ。超望遠のレンズや高倍率のズームレンズを備えたコンパクトカメラなどの機材を使えば、**必要以上に近づかずに撮影**できます。スマホ撮影では限界があることを知ってください。

ブラインドや車の中から...

餌付け撮影ダメ!! ゼットタイ!

鳥が近くに来るように餌付けするのはNG!! 餌付けは鳥の生態を狂わせたり、人気の種や個体だけ栄養状態が良くなって、生態系のバランスを崩すことにつながってしまいます。人が餌をもらうことに慣れて、渡り鳥が渡る機会を失うこともあります。

野鳥撮影には生態やマナーなど、十分な知識を持って臨むことが重要です。あわせて、自分はこの鳥を撮る必要があるのか、撮影の目的は何なのかをしっかりと自覚した行動が求められます。野鳥(野生動物)撮影は「本当は撮らないことがその被写体のために一番いい場合が多い」という特殊性があります。どうしても撮りたいのなら「人間社会にその野鳥の何を伝え、その鳥の今後のためにどう役立たせるのか」という道筋まで考えて臨むべき特殊な被写体なのです。決して安易にカメラを向けるべきではないことを知った上で、野鳥に興味を持ってもらえたらと思います。



ルリビタキ

撮影者を気にせずリラックスしているルリビタキ。カメラを構える側にも余裕をもって撮影したいもの。

木育が子どもたちにできること

この仕事にたずさわるようになってから、よく聞かれる。

「木育ってなに?」

それなりに活動も盛んになり、木育が市民権を得た今、それでも私はこの問いが苦手だ。思わず口の中でもごごと弁解してみた言葉をつぶやいたり、逆に開き直って「説明すると一時間はかかるけど、お時間あります?」と、茶化してしまったりする。そのくせ、「ああ、木工したり、森で木のお話を聞いたりすることね」と言われると、それは手段であって目的ではない、とむきになって反論したりする。

「じゃあ、何なの?」さあ、なんでしょう。あれも木育、これも木育。と言われるように、その範囲は広く、考え方によって様々だ。「色々あっていい」という中で私は私の色を探さねばならない。先人たちの教えをしっかりと心に刻み、覚悟をきめた私のクエストの旅は遠く続く。

木育の活動を行う時、目的を設定するにあたって、すばらしいガイドがある。木育の基本である三つのこと、『木とふれあう』『木に学ぶ』『木と生きる』木育の核を説明するのに、これ以上の言葉が必要だろうか。後は私なりのテーマ。少し恥ずかしいけれど言ってしまう。それは五感を通して、美しいと思う気持ちを育むことと、心のままにそれを表現し、自由で主体的な生き方でも選び取っていく力と情熱を見出すことである。

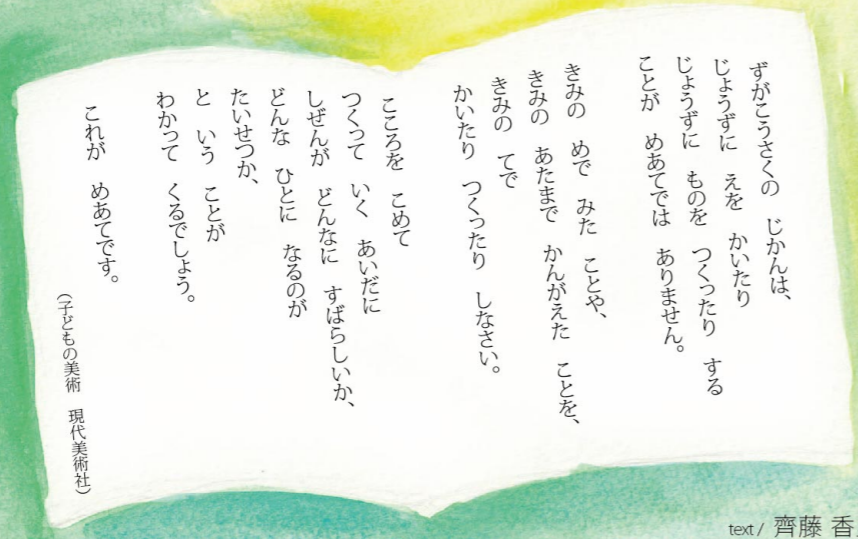
古い小学生の図画工作の教科書『子どもの美術』。惜しくも絶版になって久しいが、そこから一つの文章を引用したい。

美しいという感じは、きれいといった程度のことはもちろん、みにくさまでもふくめて、心の底までゆり動かさずにはおかないが、きれいというのは、美しいということのほんの一部にすぎない。……およそ、自然でさえあれば、なんだって美しい。……これは、わたしが言い出したからそうなのではなくて、人間が生まれる前から、そうに決まっているのだ。
(子どもの美術 現代美術社)

森の中でクラフトを行うワークショップでのこと。小さな女の子は講師である夫の膝の上でトンカチを使って木工品を作っていたが、やがてそこからストーンと地面に降りた。

あたし、おどる。少女はそう言って木洩れ日の下、森の小道を駆け出していく。そしておとなたちが見守る中、スカートをひらひらさせてクルクルとまわった。スカートに緑や黄色の木洩れ日がまわりつき、やけに真面目な表情を浮かべた少女の顔も照らし出した。まるで別人になったかのように、自信たっぷりな、ためらいのない舞だった。その美しい光景に大人たちは圧倒され、言葉がなかった。その時、少女が自分の中に何が起こっているかを認識していたかはわからない。けれど、明言し難いレベルで、自然の美しさが少女の五感を刺激し、創造性をともなった表現の発露へと結実したのだと感じた。

私が子どもたちに木育を通して受け取ってもらいたい贈り物が何なのか、伝えるのは千の言葉でも難しい。だからここは『子どもの美術』からもう一つ、この教科書全ての巻にかかげられてる文章を引用して結びとしたい。✿



(子どもの美術 現代美術社)

text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Fの森のつくり方

「Fの森」の森づくりを最初から支えてきた森づくりコーディネーターの山本さんに聞いた「Fの森」の大切なこと

●まずは歩き、理解する

「Fの森」では、「森を育て、人も育つ」を目標にしています。

スタートは2012年。Fの森に植栽をはじめた1年前です。木を植えず、ただ見て歩くだけの1年間。この期間が、森とその将来像をデザインする上でとても貴重な時間になりました。

ワークショップメンバーに、「地図を読みます」「ヤブ漕ぎもします」といったら、「えー、どっちもヤダ」と返されました。

Fの森は元牧草地ですが、背丈より高いオオイタドリの大群落が広がり、先が見通せません。手探りのように進むと、ぽかっと草原に出ます。

今では植樹地が広がり、「伝説のイタドリ迷路」と呼ばれますが、「あれはつらかった」と懐かしそうにいわれます。そう、大変だったけど、何だか楽しかったのです。

そうやって7.3ヘクタールの「F地区」をみんなで歩き回り、起伏や沢の流れ、土の湿り具合、周囲の木の種類などを観察しました。沢を渡るよう土管が埋めてあったドッカン橋、ヒバリが飛び立ったヒバリーヒルズ、トンボが群れるトンボ沢。地名をつけることで、土地の特徴が分かり、身近になりました。



伝説の「イタドリ迷路」を進む(2017年9月)

半年後には私が先頭を歩かなくても、みんなが並列に好きなルートを辿って目的地に向けて歩けるようになりました。Fの森が自分の手の中に入ったのです。

●どんな森にしたいか、みんなで考える

そして冬の間、コープの店舗の2階に集まり、森づくりプランを練りました。これがまた楽しい。地形がみんなの頭に入っているので、イメージがしやすいのです。植栽面積を年間0.4ヘクタールほどと決め、日当たりや土壌水分を考慮して小区画に分け、環境に合うテーマや樹種構成を考えます。

提案されたテーマは「実のなる木」「彩りの空間」「安らぎの小径」「深い森」など。班ごとにプランを発表すると、予想外のアイデアが飛び出し、それを1つにまとめるのは一苦労です。

幸い多様な森を知っている鈴木玲さん、種と苗木の達人・木村浩二さんがいて、植える樹種を選び、毎年20種類もの苗木を準備してくれました。

実はコーディネーターといっても、最初から明確な計画があったわけではありません。フィールドを歩き、アイデアを出し合いながら、森の将来像とその道筋を描いてきました。苗木の成長記録や雪で折れた枝の除去、やがては間伐と、



班ごとに植栽プランのアイデアを発表する(2017年11月)

植樹から育樹、育林へと活動が広がっています。基本は「自然と人の共同作業」です。現場の生態系の中で、森が育つ可能性はある程度の幅があり、その範囲で人が望み形に誘導する。森づくりといっても、人間が好きにできるわけではない。でも、少しは関わる人間の思いをかなえてほしい。

●思い通りにならないことはみんなで悩む

あるメンバーがいました。「自然の森を再生するのに、私たちがこんなに決めていいのだろうか」。その答えは私も分かりません。でも、そうした謙虚さと人の営みが重なることで、森は育ち、人も学ぶのだと思います。

植栽から10年が経ち、悩みが出てきました。植えたカツラやマカバ(ウダイカンバ)を圧倒して天然生のシラカンバが育ってきました。荒れ地を森に変えるパイオニアのシラカンバは強いのです。

植栽木を守るため「野良カバ」を伐るのか、自然の淘汰に委ねるのか。人それぞれに理念や思いは異なります。そうした悩みが人と森を近づけるのだらうと思います。✿



「Fの森」の森づくりコーディネーター NPO法人もりねっと北海道 山本 牧さん

ただいま、Fの森! 3年ぶりの「Fの森植樹会」開催!

新型コロナの影響で2019年以来開催できなかったのがFの森での植樹祭。今年は3年ぶりに行動制限のない春を迎え、主催が札幌東地区委員会となり、規模を縮小した「植樹会」を開くことができました。さわやかな初夏の空の下、30名ほどが集まってハルニレやナナカマドなどの苗木を植えました。

また、この植樹祭は植えるだけではなく除草も行いました。ご存知の方も多岐かもしれませんが、オオイタドリの根は太く、深く、掘り出すのは大変で、参加者の皆さんも必死になって根っこを掘り出すのに励んだのでした。積み上がった根っこの山を見て達成感いっぱいの方々がいました。

その後はさらにFの森の最初の植樹地(2013年に植樹)を見て木々の成長具合を確認したり、A地区で2009年に植えたミズナラの木々の枝打ちや除伐をするなど、少人数の参加者だからこそできるような、内容の濃い森づくりの一日となりました。



久しぶりの森づくり!

イタドリ除草ピフォーアフター

Event Report

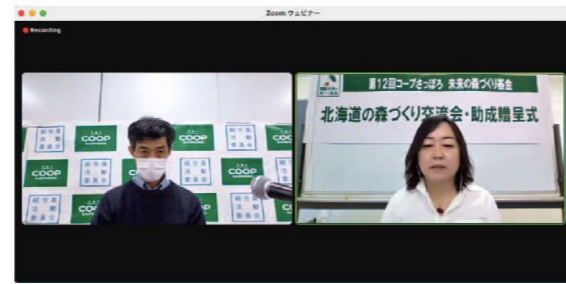
第12回 北海道の 森づくり交流会 ON LINE

毎年行われている「北海道の森づくり交流会」も新型コロナウイルスの影響で、大勢の参加者を会場に集めて行うということが難しい年が続いています。そうした関係で今年は会場をオンラインに限定しての開催となりました。

今回はゲストスピーカーとして、道内で先進の森づくりをしている団体にお話を聞きました。「苫東和みの森」をプロデュースする「NPO法人いぶり自然学校」の上田融さんは、森に人が集まる場をつくり、いろんな人の手を借りて管理をするうちに「なんか良い空間」になってきたことを話してくれました。

注目の若手林業家「out woods」の足立成亮さんは、環境保全型の林業から、森に人を呼び込む、あるいは街に森を持ち込む、という活動から人と森の距離を近づけたい、というお話を伺いました。

また、高額助成を受けた「NPO法人北海道自伐型林業推進協議会」の活動報告を聞いたり、「森の輪プロジェクト」の紹介動画を見たり、コープさっぽろの地区委員会が行う「森づくり団体交流」では旭川地区委員会と「NPO法人もりねっと北海道」の交流事業の報告、それに札幌市円山動物園との環境教育事業「どんぐりプロジェクト」の動画を見たりするなど、今も広がる森づくりのつながりや手法について学びを深めるひとときとなりました。



オンライン会議アプリ、Zoomのウェビナーを使って開催



先進の森づくりを紹介する、NPO法人いぶり自然学校の上田さん



森づくり団体交流の旭川地区委員会の活動の様子

Report

コープ未来の森づくり基金 2021年度 活動報告・会計報告

今年度もコロナ禍のため職員・エリア委員による植樹を実施しました。総植樹は2,832本(北海道ぎょれんによる植樹も含む)、全道7カ所の「コープの森」にて、2,222本を植樹しました。

道民の森の植樹地「Fの森」での、「森づくりワークショップ」は感染防止の観点から中止しました。「Fの森」にて過去に植えた木々の成長を支えるため、2014~2016年の植樹地区にて保育活動(下草刈り)を関連NPOと協力して実施しました。円山動物園とのコラボ企画であるどんぐりプロジェクトも中止しました。これまで子どもたちに伝えてきた環境教育の内容は、春夏秋冬の4つの動画にまとめ、YouTubeで公開しました。

森づくり団体への助成として、高額助成1団体、小額助成22団体に対し319万円を支援しました。また北海道ぎょれんさんが進める「魚付林植樹活動」に対し404,283円(税別)(植樹面積0.28ha、苗木本数610本分)を助成しました。

第12回北海道の森づくり交流会はオンラインで行い、森づくり活動紹介や高額助成団体の活動発表などを行い、90名が視聴しました。

基金レポート「モリイク」は22・23号を発行し、「あすもりFacebook」も「いいね!」が1,346件となりました。また、YouTubeに「コープ未来の森づくり基金」を開設し、森づくりや森づくり団体についての情報発信を行っていく予定です。

2021年度収支一覧

(単位:千円)

	21年度予算	21年度決算	内容
レジ袋積立	22,000	20,028	レジ袋削減の協力積立金
協賛金ほか	4,000	2,437	エコ協賛金、企画協賛金、書き損じハガキ収益
収入計	26,000	24,465	
植樹森づくり活動	16,000	6,499	植樹・育樹活動、つながる森づくり企画
助成金支援	4,000	3,190	森づくり団体への助成
広報・調査・運営費	6,000	6,209	広報誌、調査研究、運営費
支出計	26,000	15,898	

2022年度 北海道のあしたの森を育てる コープ未来の森づくり基金 助成団体一覧

- 高額助成(活動案件への助成)
- ✦ NPO法人 北海道自伐型林業 推進協議会 (白老町)
- 小額助成(団体への助成)
- ✦ 旭山自然調査隊 (札幌市)
 - ✦ 磐浜癒しの里山づくりプロジェクト委員会 (札幌市)
 - ✦ 北海道グッド・トイ委員会 (札幌市)
 - ✦ 熊の沢公園の自然と親しむ会 (札幌市)
 - ✦ いしかり森林ボランティア「クマガラ」 (石狩市)
 - ✦ NPO法人 里見緑地を守る会・どんぐり (北広島市)
 - ✦ 当別森林ボランティア「シラカンパ」 (当別町)
 - ✦ 河川愛護団体リバーネット21ながめ (長沼町)
 - ✦ NPO法人 三笠森水遊学舎 (三笠市)
 - ✦ フォレストクリエイティブタック(TACK) (当麻町)
 - ✦ 滝川緑の少年団 (滝川市)
 - ✦ NPO法人 長万部町緑と樹を愛する会 (長万部町)
 - ✦ 南かやべ森と海の会 (函館市)
 - ✦ 地球岬街道夢の森づくり (室蘭市)
 - ✦ 自然愛好グループヨシキリの会 (登別市)
 - ✦ NPO法人 トラストサルン釧路 (釧路市)
 - ✦ NPO法人 霧多布湿原ナショナルトラスト (浜中町)
 - ✦ 釧路武佐の森の会 (釧路市)
 - ✦ 森林ボランティア「オホーツクの会」 (北見市)
 - ✦ 帯広の森サポーターの会 (帯広市)
 - ✦ NPO法人 子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち (帯広市)
 - ✦ minotake forest works (池田町)

Information

北海道のあしたの森を育てる コープ未来の森づくり基金 フォーラム ~森から街へ、街から森へ、北海道の森と暮らしをつなぐ~

コープ未来の森づくり基金では植樹活動や森づくりへの助成、道民の森「Fの森」における森林復元ワークショップなど、北海道の森林保全のためのさまざまな活動を進めてきました。これまでの活動でつながってきた市民団体や林業者、SDGsの達成に取り組む企業など、さまざまな人との結びつきで、街から森、森から街を結ぶ「新しい道」ができています。今年は今まで深めてきた交流を市民の皆さんの場に広げ、北海道の森が私たちに与えてくれる豊かな恵み、その森を未来につなげていくために、私たちが今何に取り組んでいるかを伝えるとともに、市民の皆さんが森の楽しさに出会える場として「あすもりフォーラム」を開催します。

- ### contents
- 街と森・森と街をつなぐ(あすもりの活動紹介)
 - 基調講演(松村正治氏)
「森と地域をつなぐ
コミュニティのつくり方」
 - 森と地域をつなぐ市民活動
 - 森と街をつなぐ
Onlineディスカッション
ほか

詳細はあすもりHPで
後日公開します。

2022
12/7
WED
p.m.

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.24」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか?
右からそれぞれお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか?(はい/いいえ)
Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム(P2)
僕らが森に出る理由(P3~7)
木づかい(P8) 大きな木の小さな物語(P9)
森のキモイ! キレイ? 特別編(P10,11)
木育エッセイ(P12)
あすもりレポート(P13~15)



PRESENT!
アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、熊の木彫のルーツを紹介する書籍をプレゼントします。2種類ありますがどちらが届くかはお楽しみに。片方は熊の木彫マニュアルつき。

応募方法 アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。

応募締切 10/31(月) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-7575
メール: csapmori@sapporo.coop



こちらからもメールできます